

暮らしのひとコマ

入所者のAさんは、1階の交流ホールに降りて、生協病院に面した大きな窓のそばで外を眺めて人間観察したり、テレビを見てくつろぐのが日課です。ある日の午後4時ごろ、いつものように1階にいたAさんが「おう、おう」と声をあげ職員に何かを訴えておられました。何事かとAさんの視線の先をたどると、生協病院附属診療所の前にタクシーが止まっていて、一人のお年寄りがタクシーから降りようとするのに、足が引っかかって降りられない、運転手さんもどうしてよいかわからず、困っているという状態でした。

ちょうど休憩中の職員がその様子に気づいて、わかばから出て3人がかりでお年寄りを降ろし、自力で歩けない状態のようなので、車椅子に乗せて付属診療所まで無事送り届けました。

Aさんは外の様子をよく観察していて何かあると職員に伝えてくれます。「Aさん、お手柄だね」とみんなで喜び、お年寄りが無事帰宅できることを願いました。(あ)

<お知らせ>

○8月30日(土) 平和夏まつり

16時から18時 和歌山生協病院東駐車場にて わかばはバザーを出店します

○9月10日(水) オレンジカフェ

13時半から わかば1階交流ホールにて
「腰に不安を抱える人のストレッチ」
講師 和歌山生協病院リハビリ課

感染対策の学習会をしました

7月18日(金)、和歌山生協病院から野田看護副部長(感染管理認定看護師)に来ていただき、感染対策の基本について研修を受けるとともに、施設内ラウンドをしていただきました。研修では、標準予防策と正しい手指消毒の方法、正しい手袋の着脱と使用方法について、実演をまじえ丁寧に教えていただき理解を深めました。

野田看護副部長のお話を聞いています



感染対策で施設内をラウンド中

○9月12日(金) 「敬老のつどい」

14時から わかば1階交流ホールにて
フラダンスのステージを
楽しんでもらいます



編集後記

「無言館」のうたと題して窪島誠一郎氏のエッセーが、週刊の新聞に今年三月から連載されています。「無言館」は、「長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館」、窪島さんはその設立者で館主です(現在は内田也哉子氏と共同館主)。

連載エッセーは既に二〇回を数えますが、私はなんども涙を堪えながら読みました。紹介されている画学生とその作品に窪島さんの案内で思いを致すのはもちろんですが、窪島さんが全国を走り回って作品を集めたさいに聞き取った、妻や恋人、親兄弟・親族、師と仰ぐ人・友人など、取り巻く人々との愛情、言葉や証言が、真実心をつちます。「遠い見知らぬ異国で死んだ画学生よ 私はあなたを知らない 知っているのはあなたが遺したたった一枚の絵だ その絵に刻まれたかけがえのないあなたの生命の時間だけだ」(窪島誠一郎一九九七・五・二 「無言館開館の日」より)

戦後八十年、窪島さんのエッセーが広く紹介され、読まれることを願うとともに、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し」の日本国憲法前文の大切さをあらためてかみしめています。(一)